石動さんだって強いんだぞ！

もちもちよもぎもち

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モブくんも強いけど、石動さんだって強い。

守衛エクボかこいい

第二期おめでと。

目　次

エクボと治りかけのインフルエンザ ―― 1
師匠とストレス１００％ ―― 7

エクボと治りかけのインフルエンザ

…　しんど（暇すぎて）

本も読み飽きた。
スマホは没収中。
ゲームは下の階。
部屋からは出れない。
なにこれ

暇すぎて寝転ぶ。

なんか緑のやつ飛んでる。見たことあるなあれ

「えくぼぉぉぉ!!!!!」

「なっ?!」

◆◇◆◇

私、石動やよい（いするぎやよい）がこうなったわけを説明しよう。

私はインフルエンザとやらにかかってしまった。
しかーし！熱は1日で下がり、暇で超能力をもて余していたのだ！
そして今日が三日目！

「・・・ というわけです」
「大丈夫か？」

エクボとは何回か会ってる。
もちろんモブくんにも会ってる。
というか同じクラスだし。

「くそ暇。どーしたのエクボ」

「シゲオに追い出されちまったから、ここに来た」

「あー、律くんと大事なお話があるんだね、分かるよ」

「てゆーかお前、テレポーテーションでどこでも行けるんじゃねぇの？」

「あー、その考えはなかった。けどエクボがいるから今はいいんだ。
・・・ 守衛さん、なってくれる？」

「――ったく、しょうがねぇな」

「やっぱ私はそっちの方が好きだよ」
もー、マジで守衛さんに感謝。

「で？俺様は今から何すりゃいいんだ？」

「え？横で寝てくれればいいよ？」

「は？」

「え？さ、おふとんはいって（満面の笑み）」

「はあ・・・」

◆◇◆◇

「んー、あったかいね」

「そーだな・・・」

まずい、どんどんやよいのペースに引き込まれちまう・・・！

「ごほっ」

「ほーら、まだ治ってねぇじゃねぇか」

「だから大丈夫だっごばっ」

「いや、それ絶対大丈夫じゃねぇだろ…
ほら、横で寝てやるから休め」

「ぐすっ… ぐすっ…」

「なんだ?泣いちまったか?」

「ぢがう… 鼻づまりがひどぐで…
あ、でもすっごいうれじい…」

◆◇◆◇

「もうそれ超能力使って治しちまえよ」

「あー、その発想はなかったけどそれは無理かな」

「…」

「… 黙んないで」

「よし!霊とか相談所行こ!」

「?!」

「エクボ！手、離しちゃダメだよ！」

私はエクボの手を握る。

「せーの、で飛ぶからね？

せーの！」

二人で一緒にジャンプした。

◆◇◆◇

「よいしょっ！」

「ぎゃっ」

「あ、ごめん霊幻師匠！生きてる？」

「・・・　誰」

「あーモブくん！律くんとの大事なお話終わったんだね！よかったよかった！」

「おい降りろ・・・　石動」

テレポーテーションは成功して、何とか（霊幻師匠の上に）着地。

ただみんなキョトンとしている模様。

「ひどいなーモブくん、クラスメートの名前は忘れちゃダメだよ？」

「・・・ごめん、石動さん」

「いーのいーの！師匠、お仕事入ってないんですか？」

「今から・・・ってお前、インフルなんじゃねぇの？」

「あー、元気ですいけます（究極のドヤ顔）」

「・・・まあいい。モブ、石動、行くぞ」

「俺様、空気だな」

師匠とストレス１００％

無理を言って除霊に着いてきたものの…
そんなにヤバそうなのでもないね。

「石動、モブ。さっさと終わらして帰るぞ」

モブくんと私は、超能力でどんどん除霊していく。

「… これで終わりか？」

師匠が聞いてくる。

「いや、他の階。怪しいと思いますよー？」

「僕もそう思う」

師匠はしばらく考えてから言った。

「よし、こっからは単独行動で行くか。モブは３階、石動は４階を頼む。俺は２階に行く」

◆◇◆◇

さっき除霊したのが１階。
ビルまるごと取り付かれてそうな感じがして、ちょっと不安だった。
… てか、今も不安。
さすがに病み上がりだときついな…

ボロボロの階段の先には、事務所の跡らしきものが残っていた。
段ボールやコピー紙が散乱してて、なんか不気味。

「サイコメトリーでも使うか・・・」
私は近くの机に手をかざして、残留思念を読み取ることにした。

「うわっ！」

読み取れたのは、恨みとか疲れとか？
ん？疲れ？

・・・ブラック企業？

社員の不満・・・かな？

「やあ、そこのお嬢ちゃん」

声がして振り返ると、おじさん（霊）が立ってた。
あー、めんどくさくなりそう

「こんなところに一人で来ちゃあ、ダメだよ」

いつでも超能力が使えるように、全身に力をこめる。

「なんで・・・ 来ちゃダメなんですか」

「それはね・・・」

「「「おじさんみたいな人は君みたいな子が好きだからさ」」」

「うっわ変態！」

しかも絶対人増えたよね？

全身にこめた力を超能力に変えて、何とかおじさん（霊）は追い払えた。

「お嬢ちゃん！」

「うっわまだいる！」

「こんなところにいたら、親が心配するだろう？
もっと親の気持ちを考えなさい」

「…」

忘れてたな、エクボに留守番頼むの。

「お家の方はね、君を思って一生懸命真剣に働いていらっしゃる。
それを考えたことはあるかい？」

「…」

「君みたいな子は、家で手伝いでもしてなさい。
外で遊ぶなんて、全く…」

やば、頭痛くなってきた。
そろそろ来るかも。

…　９３％，９４％，９５％，９６％…

「最近の若い奴らは…」

ピキピキッ

…　９７％，９８％…

…　９９％

石動やよい。

彼女のストレスはどんどん溜まり、
限界を超えようとしていた…。

そして今、石動やよいのストレスは限界を超える！

…　１００％！

「るっさい！」

おじさん（霊）が怯む。

事実なのは分かるんだ。
でも、でも！

「子どもの気持ちも考えてよっ！」

「石動！」

「石動さん！」

「子どもは親の操り人間じゃないのっ！
何その態度？そもそもあんたの娘じゃねーし！
黙ってるからっていい気になってんじゃねーぞ！」

ぶわっ

周りが火で包まれる。

パイロキネシスぅ…
ストレスが１００％になったときだけに出てくる私の超能力。
コントロール出来ないし、いつ出るのか分かんないから…

「おいモブ！水！水！ねえか?!」
「あわわわ…」

「・・・ でもそれって事実なんだよね。私だってこんなこと
したくてしてる訳じゃない・・・ こともないけど。
私が悪いんだよ、おじさんは悪くない。ごめんね」

おじさんを除霊する。

八つ当たり・・・ よくないね。

炎はいつの間にか消えていた。

「おい石動！水持ってきたぞ・・・ ？」

「・・・ 消えてる」

「あ、ごめんなさい」

急いで笑顔を作る。

なんか今、すっごい辛いけど・・・

意識が遠退いていく。
パイロキネシス使ったからな・・・
慣れてるけど。

「ごめん、師匠・・・」

「どうした?!」
「石動さん?どうしたの」

◆◇◆◇

目が覚める。

ここ・・・どこ?

ベッドに横になってる状態なんだけど、
ここ私の部屋じゃないんだよね。

「どうだ、目、覚めたか?」

「師匠ぉ?!」

「お前、あのあと倒れてたんだぞ」

「あ、知ってますいつもです」

「いつも、なのか？まあ明日から家でおとなしく寝てるんだな」

「・・・ んでここ、どこですか」

「どこって俺の家なんだが」

師匠の家・・・ ｏｈ・・・

「モブくんは？」

「とっくの前に帰ったぞ」

「そうですか・・・。なんかごめんなさい。それとありがとうございます」

「お前な、笑顔で全部乗りきろうとしてんだろ？
辛いときはな、逃げたっていいんだ」

優しい声で言われる。

「Ｉｃｈ ｍａｇ ｄｉｃｈ ｗａｈｒｓｃｈｅｉｎｌｉｃｈ．」

「は？」

「あ、なんもないです」

「そういうのが一番気になるんだよな・・・
そうだ、飯奢ってやるよ。何がいい」

なんでもいい、という言葉を飲み込む。

「やっぱラーメンですねー」

「いいのか？やよいが好きなのでいいんだぞ」

・・・やよい？

いま、私「やよい」って呼ばれたよね？

もー、心臓に悪いな・・・

はあ・・・